

平成30年6月14日現在

機関番号：32618

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13246

研究課題名（和文）日本語の聴解力育成のためのVAシャドーイング法の開発

研究課題名（英文）Development of a VA shadowing method for improving the listening skills of Japanese

研究代表者

中山 誠一（Nakayama, Tomokazu）

実践女子大学・文学部・教授

研究者番号：10552763

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本語の聴解力育成のためのVAシャドーイング法を開発することにあった。2年間の調査で、以下の2点を明らかにした。第一に、日本語学習歴が1年程度の大学生を対象とした調査では、VA法は、シャドーイング群と比較して、ビジュアル・シャドーイング法と同等に、漢字の読みの学習に効果を発揮する可能性があることである。第二に、小中学生を対象とした調査では、高学年のVA群の成績が、全学年の他群と比較して有意に伸長していることが判明した。本研究のまとめとして、VA法は、日本語学習歴が長い学習者に行くと、VV法と比較して、より漢字の読み方の学習に効果を発揮する可能性があることを明らかにしたといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a VA shadowing method to improve the listening skills of Japanese by facilitating the learning of Kanji pronunciation. The two-year study revealed that for novice learners, both the VA method group, where learners are repeatedly exposed to Kanji pronunciation, and the VV method group, where learners are repeatedly exposed to Kanji and hiragana (phonetic alphabet), are possibly equally effective in improving the learning of Kanji pronunciation. Additionally, the pre-posttest comparison among elementary school students revealed that only the post-test scores of the highest graders in the VA method group improved significantly, while none of the differences in the other groups were significant. Based on these findings, this study concluded that the VA shadowing method is most effective in improving the learning of Kanji pronunciation among advanced learners.

研究分野：学習開発

キーワード：VA shadowing VV shadowing shadowing 漢字の読み方

1. 研究開始当初の背景

VA シャドーイング(以下 VA)法は、従来のシャドーイング法を改善し、英語の聴解力向上を目的として開発された学習法で、実証的研究においてその有効性が示されており(中山, 2011)、英語の「単語」とその「音声」を結びつけるということが特徴である。

一方、日本語教育においては、漢字の読み方の学習を促進する効果的な学習法の開発が当初課題となっていた。英語の聴解力向上と同様、日本語の聴解力を向上させるためには、「漢字」(文字)とその「読み方」(音声)を関連付けて学習する必要がある。そこで、本研究では、英語教育分野で開発された VA 法を漢字の読み方の学習に応用し、日本語の聴解力を促進する新たな VA 法の開発を目指すことにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語の読み方の学習を促進し、聴解力育成を目指す新たな VA 法を開発することにあつた。

3. 研究の方法

平成 28 年度は、中山(2016)を参考に、漢字圏と非漢字圏出身の大学生を対象に、VA 法の実証性を検討した。具体的には作成した教材に基づいて、漢字圏学習者 14 名(調査 1)と非漢字圏学習者 9 名(調査 2)を対象に、3 群(VA 群、ビジュアル・シャドーイング(以下 VV)群、シャドーイング(以下 AS)群)を設定し、どの方法が漢字の読みの学習を促進するかについて検討した。以上の実験結果については、2016 年 8 月にインドネシアで開催された国際日本語教育学会と、同年 10 月に高知で開催された日本教育心理学会第 58 回総会にて発表を行った。さらに、調査 2 の結果に基づいて、教材に修正を行い、新たに非漢字圏の日本語学習者(大学生 30 名:日本語学習歴平均 12 ヶ月)を対象に調査を行った。

平成 29 年度には、まず、昨年度最後に行った追調査結果の分析を行い、その結果について、日本教育心理学会第 59 回総会にて発表を行った(調査 3)。さらに、本調査結果が、あらゆる日本語学習者に適応できうるものなのかを検証するために、学習方法の違い(VA 群、VV 群)に加えて、学習歴を新たな要因に加えて調査を行うことにした(調査 4)。その理由は、日本語の音韻的知識量の差を要因に加えることができると考えたからである。調査は、米国ノースカロライナ州シャーロットにあるワデル・ランゲージ・アカデミー(日本語でイメージ教育を実施している幼・小・中の公立学校)で、平成 30 年 2 月から 3 月にかけて現地で個別に行った。本結果は、平成 30 年度日本教育心理学会第 60 回総会にて発表を行う予定である。

4. 研究成果

(1) 調査 1 では、漢字圏出身者を対象に、VA 法の実証性について検討した。

A. 実験協力者

日本語が中級レベルである漢字圏出身の大学生 14 名が調査に参加した。14 名の協力者を、VA 群に 5 名、VV 群に 5 名、および AS 群に 4 名を、各群の聴解力が均等になるように割りあてた。

B. 実験計画

本実験は、3 × 1 の要因配置を用いた。第 1 の要因は、トレーニング方法の違い(VA 法・VV 法・AS 法)であった。第 2 の要因は漢字読み取りテストの変化(事前・事後テスト)であった。

C. 調査材料

山内・橋本・金庭・田尻(2012)より、夏祭りに関する短いエッセイ(329 文字)を使用し、以下に示す 4 つの教材を作成した。

漢字の聞き取りテスト(教材 1): 介入の効果を測定するため、読解材料を参考に 30 問(ダミー問題 2 問を含む)からなる漢字の聞き取りテストを作成した。日本語の音声を聞き、その音声が示す漢字を 4 つの選択肢から 1 つ選ぶ問題であった。このテストは出題順序を変えて、実験の前後に実施された。

音声教材(教材 2): VV 群と AS 群で使用する音声教材として、読解材料を音読した音声を録音した教材を作成した。

VA 用教材(教材 3): マイクロソフト社のパワーポイントを利用して作成した。読解材料全文を音声情報で 5 回、文字情報で 5 回呈示できるようにスライドを作成した。

VV 用教材(教材 4): 教材 3 と同様にマイクロソフト社のパワーポイントを利用して作成した。読解材料全文について漢字を含む文字情報で 5 回、ひらがなのみで 5 回呈示できるようにスライドを作成した。

D. 手順

実験は個別で行われた。協力者は、漢字聞き取りテスト(事前テスト)、指定された方法によるトレーニング、漢字聞き取りテスト(事後テスト)の順に、調査に参加した。調査にかかった時間は約 90 分であった。

E. 結果

Table 1 に漢字聞き取りテストの結果を示す。事前に行った SPOT テストの点数を共変量、トレーニング方法の違いを固定因子とし、漢字聞き取りテストの変化量(事後テスト成績 - 事前テスト成績)を目的変数とする共分散分析を行った。その結果、予想に反して、VA

Table 1. 漢字聞き取りテスト結果

	VA 群		VV 群		AS 群	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
N	5	5	5	5	4	4
Mean	12.94	19.00	10.20	19.80	10.50	12.25
SD	5.18	4.64	2.17	2.28	5.80	6.34

群と VV 群は、AS 群と比較して同等程度漢字の読みの学習を促進することが判明した。

(2) 調査 2 では、非漢字圏出身者を対象に、VA 法の実証性について予備的検討を行った。

A. 実験協力者

日本の国立大学に通う留学生 9 名 (イギリス出身者 2 名、オランダ出身者 2 名、デンマーク出身者 1 名、ポルトガル出身者 1 名)、ブラジル出身者 1 名、トリニダード・トバゴ出身者 1 名およびインド出身者 1 名) が実験に参加した。実験協力者の日本語学習歴の平均は、31.0 ヶ月であった。事前に実施した日本語能力テスト (SPOT テスト) の結果によれば、協力者の平均点は 60.9 点であった。9 名の協力者を 3 名ごとに、VA 群、AS 群、VV 群に割りあてた。

B. 実験計画

本実験は、 3×1 の要因配置を用いた。第 1 の要因は、読解方法の違い (VA 群・AS 群・VV 群) であった。第 2 の要因は漢字書き取りテストの変化量 (事後テスト結果 - 事前テスト結果) であった。

C. 調査材料

調査 2 で使用した材料と同一のものを使用した。

D. 手順

実験は個別に行われた。実験協力者は、SPOT テスト、漢字書き取りテスト (事前テスト)、指定された方法によるトレーニング、漢字書き取りテスト (事後テスト) の順に、実験に参加した。各自にかかった時間は約 90 分であった。

E. 結果

漢字書き取りテストの変化量を Table 2. に示す。事前に行った SPOT テストの結果を共変量、漢字書き取りテストの変化量を目的変数とした共分散分析を行った結果、群間の平均値に有意な差はなかった。しかしながら、この予備実験を通じて、日本語版 VA 法の実証性を検証するには、日本語の表記の独自性を考慮し、実施方法に修正すべき点があることが明らかになった。

Table 2. 漢字書き取りテストの変化量

	VA 群	AS 群	VV 群
<i>N</i>	3	3	3
<i>Mean</i>	2.67	2.67	3.00
<i>SD</i>	0.58	1.53	3.00

(3) 調査 3 では、調査 2 の結果に基づいて調査材料を修正し、非漢字圏出身者を対象に、VA 法の実証性について検討した。

A. 実験協力者

オランダの国立大学日本語学科在籍の学生 30 名が実験に参加した。実験協力者の日本語学習歴の平均は、12 ヶ月であった。30 名の協力者を 10 名ごとに、VA 群、VV 群、および AS 群、に割りあてた。

B. 実験計画

本実験は、 3×1 の要因配置を用いた。第 1 の要因は、トレーニング方法の違い (VA 法・VV 法・AS 法) であった。第 2 の要因は漢字読み取りテストの変化 (事前・事後テスト) であった。

C. 調査材料

報告者が作成した日本語教材「お年玉こわい」(316 文字) を材料とし、調査 1 と同様の方法で、漢字の聞き取りテスト、音声教材、VA 用教材、および VV 用教材を作成した。

D. 手順

実験は集団で行われた。実験協力者は、漢字聞き取りテスト (事前テスト)、指定された方法によるトレーニング、漢字聞き取りテスト (事後テスト) の順に、実験に参加した。各実験にかかった時間は約 60 分であった。

E. 結果

Table 3. 漢字聞き取りテスト結果

	VA 群		VV 群		AS 群	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
<i>N</i>	10	10	10	10	10	10
<i>Mean</i>	10.00	12.30	10.40	12.90	10.60	10.90
<i>SD</i>	2.00	2.58	3.60	3.07	2.01	2.08

漢字書き取りテストの結果を Table 3. に示す。トレーニング方法の違いを要因 1 (被験者間)、漢字聞き取りテストの結果を要因 2 (被験者内) として、2 要因の分散分析を行った。その結果調査 1 と同様、VA 群と VV 群は、AS 群と比較して、同等程度漢字の読みの学習を促進することが判明した。

(4) 調査 4 では、日本語学習歴に違いがある非漢字圏出身者を対象に、VA 法の実証性について比較検討した。

A. 実験協力者

米国ノースカロライナ州にある公立小中学校ワデル・ランゲージ・アカデミーに通う小学 1 年生から中学 2 年生までの、95 名が実験に参加した。実験協力者の日本語学習歴の平均は、約 4 年 3 ヶ月であった。95 名の協力者を各学年均等な人数になるように、VA 群、および VV 群に割りあてた結果、VA 群が 48 名、VS 群が 47 名となった。

B. 実験計画

本実験は、 $3 \times 2 \times 1$ の要因配置を用いた。第 1 の要因は、日本語学習歴の違い (低学年・中学年・高学年) であった。第 2 の要因は、トレーニング方法の違い (VA 法・VV 法) であった。第 3 の要因は漢字音読テストの変化 (事前・事後テスト・遅延テスト) であった。

C. 調査材料

漢字材料: 北野・松本 (2011) を参考に、報

告者が作成した日本語教材「ラクダの話」(81文字)に使用されている9組の漢字表現を材料とした。この材料に基づき、以下の4つの教材を作成した。

漢字音読テスト：介入の効果を測定するため、漢字材料を参考に12問(ダミー問題2問を含む)からなる漢字の音読テストを作成した。モニターに呈示される漢字を音読するテストであった。このテストは出題順序を変えて、実験の前後に3回実施された。

音声教材：VA法で使用する音声教材として、漢字材料を音読した音声を録音した教材を作成した。

VA用教材：マイクロソフト社のパワーポイントを利用して作成した。

VV用教材：と同様にマイクロソフト社のパワーポイントを利用して作成した。漢字材料について漢字を含む文字情報で3回、ひらがなのみで3回呈示できるようにスライドを作成した。

D.手順

実験は個別で行われた。実験協力者は、(1)漢字音読テスト(事前テスト)、(2)指定された方法によるトレーニング、(3)漢字音読テスト(事後テスト)の順に、実験に参加した。各実験にかかった時間は約15分であった。さらに実験1週間後に漢字音読テスト(遅延テスト)を実施した。

E.結果

漢字音読テストの結果(遅延)をTable 4.に示す。分析は学年ごとではなく、3つの学年グループ(低・中・高)に分けて行った。事前テストおよび事後テストの結果を共変量、トレーニング方法の違いと学年グループを固定因子とし、遅延テストの結果を目的変数とする共分散分析を行った結果、高学年のVA群の成績が、全学年の他群と比較して有意に伸長していることが判明した。

Table 4. 漢字音読テスト結果(遅延テスト)

	VA群			VV群		
	低	中	高	低	中	高
<i>N</i>	17	19	12	16	19	12
<i>Mean</i>	2.36	2.79	4.08	2.13	2.21	3.08
<i>SD</i>	1.22	1.87	1.17	1.31	1.65	1.13

(5)まとめ

以上4つの調査結果から、本研究のまとめとして、VA法は、日本語学習歴が長い学習者に行うと、より漢字の読み方の学習に効果を発揮する可能性があることを明らかにしたといえる。

<引用文献>

中山誠一、ビジュアル・シャドーイングの効果、リメディアル教育研究、6巻、2011、151-159

中山誠一、VAシャドーイング法は日本語学習者の語彙学習に効果を発揮するのか、実践女子大学文学部紀要、58号、2016、58-67

山内博之、橋本直幸、金庭久美子、田尻由美子、日本語教育版分類語彙表を活用するための日本語教材、031、特定領域研究「日本語コーパス」平成22年度研究成果報告書、2012

北野日出夫、松本武夫、小学理科学習事典、2011

5.主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計4件)

NAKAYAMA, Tomokazu, 'Efficacy of VA shadowing Method for Improving Listening Skills for JSL learners', 2018 5th International Conference on Education and Psychological Sciences (ICEPS 2018), 2018

中山誠一、「漢字の読み方の学習におけるVAシャドーイング法の効果」、日本教育心理学会第59回総会、2017年

NAKAYAMA, Tomokazu, FURUMOTO, Yumi 'Efficacy of VA shadowing Method for Pronunciation Learning of Kanji,' 日本語教育国際研究大会、Bali ICJLE 2016, インドネシア、2016年

中山誠一、古本裕美、「VA法は聴解力向上に効果を発揮するのか 非漢字圏日本語学習者を対象とした予備的検討」、日本教育心理学会第58回総会、サンポートホール高松・かがわ国際会議場、2016年

6.研究組織

(1)研究代表者

中山 誠一(NAKAYAMA, Tomokazu)
実践女子大学・文学部・教授
研究者番号：10552763

(2)研究分担者

古本 裕美(FURUMOTO, Yumi)
長崎大学・国際教育リエゾン機構・准教授
研究者番号：80536326

濱田 陽(HAMADA, Yo)
秋田大学・学内共同利用施設等 准教授
研究者番号：00588832

山内 博之(YAMAUCHI, Hiroyuki)
実践女子大学・文学部・教授
研究者番号：20252942

(3)研究協力者

野口 勝 (NOGUCHI, Masaru)

Faculty of International Business and
Communicationon Zuyd University of
Applied Sciences 講師